

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：84604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26630288

研究課題名(和文)「復元学」構築のための基礎的研究

研究課題名(英文) the basic research to construct "Reconstructionology"

研究代表者

海野 聡 (Unno, Satoshi)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：00568157

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：「復元学」の構築に向けて、その歴史的な背景を整理した。またこれまでに行われてきた発掘調査に基づく復元の過程を調査し、それを明らかにした。これらの成果をまとめた出版物として、『古建築を復元する - 過去と現在の架け橋 -』（吉川弘文館、2017年）を刊行した。ここでは、平城宮朱雀門・大極殿院、四天王寺、登呂遺跡などの事例を取り上げている。

研究成果の概要(英文)：To construct "Reconstructionology", we surveyed the back ground of history. In addition to this, we investigated the case of reconstruction process based on excavation. Then I published "To reconstruct historical buildings -the bridge between the present and the past-" as one result of this project.

研究分野：日本建築史

キーワード：復元(復原) 古代建築 発掘 遺跡

1. 研究開始当初の背景

過去に存在した建物の検討は、大内裏図考証をはじめ、江戸時代から考証学という学問分野のなかで存在し、寛政期の内裏復興などに活用されてきた。近代に入ると、平安宮八省院を8分の5で復元した平安神宮（伊東忠太 1895）や登呂遺跡の復元考察、藤原豊成殿の模型作製がおこなわれ（関野克 1934、1936）、近代学問である建築学の一分野として研究され、現在、平城宮大極殿の復元まで続いている。

一方、現代社会の中で復元建設が各地で行われており、申請者自身は上部構造の復元という観点を持ちつつ、発掘遺構と建築技術に関連付ける考察を重ねてきた（海野 2006～2013）。その結果、一部の復元建物は学術的な検討過程が不明、もしくは不十分という実態が明らかとなってきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は「復元学」の基盤構築であり、ここにいう「復元学」は2つに大別される。

儀式書・絵図・図面の分析による、平面を中心とした復元

平城宮第一次大極殿など、建設を目的とした立体的検討を伴う復元

：近世以来の考証学とその活用を明らかとし、復元学との異同を検討することで、復元学の歴史的かつ学問的位置付けを試みる（目的A）。既存の復元根拠を学術的に整理し、その分析と今後の復元建設事業の基礎資料の作成を目指す（目的B）。を包括的にとらえ、その融合により発掘遺構の理解の促進と各自自治体の発掘現場担当者への周知を図る（目的C）。これらを通じて、復元事業を発掘遺構の視覚化という単なる事業ではなく、学問として復元学の基盤の構築を目的とした。

3. 研究の方法

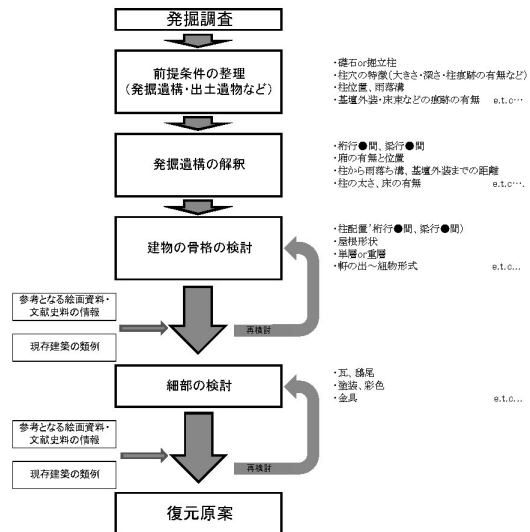
目的Aについては、海野の既往研究（海野 2006～2013）を下地として、建築学の加藤悠希（協力者・当時竹中大工道具館）・満田さおり（協力者・宮内庁）とともに、平安宮の考証学と寛政期内裏造営を再検討し、古代宮殿の平面・空間・儀式的復元考察をおこなう。また宮殿建築の現存事例（中国紫禁城）を現地調査した。

目的Bについては、建築学の海野と考古学の青木敬・小田裕樹（ともに分担者・奈良文化財研究所）が研究アシスタントを用いて発掘遺構と復元整備・検討を対応させたデータベースを作成し、「復元学」の基礎資料を整備する。また復元整備事例について集落・社寺・宮殿・官衛の3類型に絞り、現地調査した。

目的C：学会発表などによる公表と発掘担当者との直接交流により、研究成果を現場に還元した。

4. 研究成果

復元学の手法の開発 復元は前提条件によって、大きく結果が変わってくる。また同じ前提条件であっても、何を重視するかによって、その過程にはさまざまな枝分かれがある。それゆえ、これに基づいた復元のプロセスが求められる。まずは前提条件の整理（発掘遺構・出土遺物）、発掘遺構の解釈、建物の骨格の検討、細部の検討、復元原案の作成という大きな流れが求められる（下図）。



復元原案と復元実施案 実際に復元された建物については、東寺の形を学術的に考えた復元原案と復元実施案を分けて考えることが必要である。

復元建物を実際に建てるには現在の建築基準法など、さまざまな制約をクリアしなくてはならない。国宝・重要文化財などは、この要件から除外されるが、復元建物にはこれが大きなハードルとなる。そのため、当時の形を考えた「復元原案」と実際に建てられる「実施案」には大きな違いが出てくるのである。もちろん、第一次大極殿と朱雀門も例外ではなく、両者ともに様々な構造的な工夫がなされている。

複数の復元案 これまでも述べてきたように、復元は前提条件・考察過程により、異なる多様な復元案が考えられる。現地に建てられる場合、もちろん、このなかから一つに絞り込んで建てざるを得ない。そのため、現地を訪れた人はその姿がかつて建っていたと受け取ってしまう可能性もある。それゆえ、復元の過程で考えられた復元案を提示することが必要である。その例として、平城宮第一次大極殿院や出雲大社本殿の復元案があげられる。

復元学の可能性 復元建物を現地に建てる際に、さまざまな考察の過程を経ていること、そして副次的に多くの学術的な成果が得られていることは、前に述べたとおりである。そこで、復元の学問としての可能性を述べておきたい。すなわち復元学の構築である。

各地の遺跡で復元建物が完成してきたが、

これらを立ち止まり、振り返る作業は十分とはいえない。登呂遺跡における関野克案に対する批判や葛藤などは珍しい。そこで、一定の批判的検討が可能となる素地ができた今、学問として「復元学」という新たな道が開けてきた。その対象は、もちろん、現代的な制約によって、構造補強などを施された復元実施案ではなく、当時の建造物を検討した復元原案を対象とするべきである。

復元学の課題として、復元手法の確立も社会的に求められるものであろう。やはり一般には復元過程を知る機会がほとんどないため、ブラックボックスのように思ってしまうのである。そのためには 復元過程の明示、復元原案と実施案の区別、復元整備における複数案の意義、復元に対する批判的検討、等が必要な項目としてあげられる。これらの課題の検討を経ることで、復元学の方法論としての確立の足掛かりとなる。

近年、復元への関与を避け、復元に関する考察という行為そのものに対して、批判的立場がとられ、復元と学問の距離が離れているようにも感じられる。しかし日本建築史学の開拓者である伊東忠太や南都古代建築史の礎を築いた大岡實らの言葉を借りれば、

「自ら実地に日本の建築を計画し設計し、更に現実にそれを造り上げてみる必要がある。」(岸田日出刀『建築学者伊東忠太』乾元社一九四五年)

「かなりの想像を加えても立体的に復原して、具体的に眼に見える形にすることが、建築史の発展に必要」で、「次の研究者が修正を加えて 進歩させていけばよい」とする(大岡實「鎌倉時代再建の東大寺」『南都七大寺の研究』中央公論美術出版一九六六年)

といった考え方が日本建築史の研究の根底にある。

復元の将来 さて復元はもちろん、過去の建物を考察することであるが、その将来についても述べておきたい。実は、すぐそこまで、新しい未来は来ているのである。復元にCGを活用する方法、すなわち、VR・ARである。

VRはVirtual Realityの略で、仮想現実といわれるものである。Googleなどをつけて、コンピューターによって作られた人工環境・仮想空間を体感するものである。VRの環境さえあれば、どこでも利用できる。これに対して、ARはAugmented Realityの略で、拡張現実といわれるものである。現実の一部を改変するもので、利用者の位置情報と対応することで、遺跡の現地ですマホやタブレットなどをかざすと、そこに、復元建物のCGが現れるといった利用が可能である。

特にARは遺跡の復元の将来を考えるうえで、有用であろう。例えば、安土・桃山時代に平安宮大極殿の地には聚楽第、難波宮の上には大阪城が築かれている。そのため、両者とも、価値の高い遺跡・遺構ではあるが、

同時に復元することはできず、選択に迫られる。もっと近接した時代でも、例えば、平城宮では奈良時代の前半と後半で、両方の遺構があるが、やはり一方しか、現地に復元することはできない。ここで活躍するのがARである。たとえ、現地にある時期の復元建物が建てられていたとしても、ARを用いることで、別の時期の様子を体感することができるのである。また複数の復元案が提案されている場合なども、有効な方法であると、将来的な可能性が窺われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計5件)

海野聡「古代日本における建物の維持管理に関する法的規定」『日本建築学会計画系論文集』705、2527-2534頁、2014年、査読有

海野聡「古代建築の組物・架構・天井にみる「見せる」要素と「隠す」要素 第一次大極殿院の復原研究 12」『奈良文化財研究所紀要2014』1-3頁、2014年、査読無

海野聡「平城宮における幢旗の遺構の発見 奈良県奈良市平城宮跡」『古代文化』66-2、142-144、2014年、査読有

海野聡「復元学の構築とその定義に関する試論」『日本建築学会大会学術講演梗概集F-2』851-852頁、2015年、査読無

海野聡「古代建築のイメージの限界 描かれた古代建築の特質」『奈良文化財研究所紀要2015』28-29、2015年、査読無

(学会発表)(計7件)

海野聡「建築復元の最前線 まちづくりのなかに活かす歴史」『まちづくり推進講演会』2015年2月14日、諫早市美術・歴史館(長崎県・諫早市)

海野聡「復元学の構築とその定義に関する試論」『日本建築学会大会学術講演』2015年9月6日、東海大学(神奈川県・平塚市)

海野聡 "New Aspect of Architectural History based on Excavation" SISJAC-SOAS, 2016.3.11, York University, (York, Great Britain)

海野聡「東西楼は入母屋か寄棟か 平城宮第一次大極殿院の復原に向けて」『第7回東京講演会 発掘遺構から読み解く古代建築』2015年10月25日、有楽町朝日ホール(東京都・千代田区)

海野聡「復元を学問する - 「復元学」の誕生と未来 -」『第118回公開講演会』2016年6月18日平城宮跡資料館(奈良県・奈良市)

海野聡 "Ceremonies in Gardens and Courtyard of the nobility in ancient Japan" " CIHA 2016 in Beijing 34th World Congress of Art History Session12" 2016.9.18、中国美術院(北京・

中国)

海野聡「日本建築史の概要と実験考古学としての復元 平城宮朱雀門の事例から」
『考古学的知見から読み取る大陸部東南アジアの古代木造建築』2017年2月13日,
東京文化財研究所講堂(東京都・台東区)

〔図書〕(計3件)

海野聡(単著)『奈良時代建築の造営体制と維持管理』吉川弘文館2015年

海野聡(分担執筆)「東西楼は入母屋か寄棟か 平城宮第一次大極殿院の復元に向けて」『第7回東京講演会 発掘遺構から読み解く古代建築』クバプロ、2016年

海野聡(単著)『古建築を復元する 過去と現在の架け橋』吉川弘文館2017年

6. 研究組織

(1)研究代表者

海野 聡(Unno Satoshi)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号:00568157

(2)研究分担者

青木 敬(Aoki Takashi)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・客員研究員

研究者番号:10463449

小田裕樹(Oda Yuki)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号:70416410

(4)研究協力者

加藤悠希(Kato Yuki)

九州大学大学院・芸術工学研究院 環境デザイン部門・准教授

満田さおり(Mitsuda Saori)

宮内庁京都事務所・内閣府事務官